



会員寄稿

『大洲高校』という名の本

教頭 甲斐 哲也

先般、開校記念日の講話を全校集会で行いました。保護者の方の中には、大洲高校の卒業生という方もおられると思います。大洲高校が開校したのはいつかご存じですか。

正解は1901（明治34）年4月21日です。愛媛県立宇和島中学校大洲分校として設立されました。したがって、この日が大洲高校の開校記念日となっており、今年で創立124年となります。ただし、『大洲高等学校百年』によると4月21日という日付は記載されていませんでした。4月1日創立、4月11日入学試験とあるので、4月21日は実際に学校が始まった日と思われま

その後ですが、

1904（明治37）年 独立校となり愛媛県立大洲中学校と改称。

1948（昭和23）年 学制改革により愛媛県立大洲第一高等学校へ。

1949（昭和24）年 再編成により大洲第二高等学校（旧大洲高等女学校）、大洲農業高等学校と統合し、愛媛県立大洲高等学校へ。

1953（昭和28）年 大洲農業高等学校が独立。

ということで現在に至ります。

ところで、「一粒の米」という話があります。

「これは、わずかな一粒の米に過ぎない。一粒の米でさえ、熱い湯で煮られ、歯で砕かれ、胃腸で消化されるという苦しい道を通り、その人の血となり肉となり向上進化していくではないか。」です。ちなみに、この話に勇気づけられたのが、森恒太郎（森盲天外・1934年没）です。彼は、33歳のとき、両眼を失明しましたが、日本で初めての目に障がいのある村長（余土村・現在の松山市余戸）となり、村づくりに努めました。また、現在の愛媛県立松山盲学校、松山聾学校の前身をつくったのも彼です。

さて、一粒の米を本の1ページ1ページを構成する紙のひとかけらと考えると、大洲高校は2万9千人を上回る卒業生をはじめ、保護者の方々や教職員などの多くの関係者が綴ってきた『大洲高校』という123ページの一冊の本と言えるのではないのでしょうか。その一人一人はひとかけらに過ぎないものの、ページを構成する重要かつ貴重な役割を果たしていると考えています。講話では、一人一人が『大洲高校』という本を構成する欠くことのできない存在であるということ、この本には染みを付けてほしくないということ、地域の方々をはじめ、誰もが読みたいと思ってくれるようなおもしろい、そして、ためになる本にしていこうと話をしました。私も大洲高校は通算で12年目の勤務となるので、少しは何か書き込めたかなと思います（染みは付けていないと思うのですが）。

令和8年度から大洲高校はこれまでとはちょっと違ったページを綴っていくこととなります。まずは読み応えのある本になるよう準備を進めていきますので、保護者の皆さんもお子さんと一緒に124ページ目を綴ってみませんか。